

教員プロジェクト報告書

2017年4月4日 福知山公立大学地域経営学部 平野 真

研究テーマ

無形資産活用による地域観光資源開発：
福知山公立大学地域協働型 PBL 教育を通じて（継続研究）

要旨：

2017年4月から行ってきた地域の観光資源開発に向けた地域協働型 PBL 教育について、引き続き行い、主としてその効果検証と、イベントなどの継続を図った。効果検証については、活動に参加した大学生、環境会議の方々、小・中学生などへのヒヤリングや感想文依頼を行い、それぞれに活動によって地域資源の重要性への気づき、活動における連携手法に対する気づき、和紙灯籠づくりへの参加による喜びなど、参加者の様々な気づきや喜び、連携感が醸成されることを定性的に検証した。イベントの継続については、防水型和紙灯籠の開発そのものに時間がかかり、冬のイベントは延期し、次年度でのイベントになぐこととした。

1. 研究の背景

福知山市は、歴史的な資産に関しては、元伊勢神社とか大原神社といった貴重な文化遺産があるほか、大江地方の鬼伝説とか、民俗学的な観光資源にも恵まれている。しかしにもかかわらず、宮津、城崎、舞鶴、篠山などといった周辺地域に比べて観光客や観光消費額は少ない。周辺地域が年間 200 万人以上の観光客がある中で、福知山市は平成 22 年には約 120 万人だった観光客が、平成 26 年には 80 万人を切っており、減少傾向が強い。この福知山市の観光不振の背景には、福知山線の大事故、由良川の洪水、花火大会での爆発事故といった不幸な事件によってある種の負の地域イメージ（風評）が形成されている可能性もある。しかし持っている観光資源を有効に活用すれば、周辺地域と同等ないしそれ以上の観光客を獲得し、観光産業を前進させる潜在的な力は、福知山市にも十分あると考えられる。むしろ現時点での問題点は、観光資源の演出の仕方や、観光そのものに対する地域社会の取り組み方などに、そうした潜在力を生かすきれない課題があるのではないかと考えられる。

2. 研究目的

地域には活用されていない様々な資源が眠っている。それを有効な観光資源・産業資源として育て上げていくには、ソーシャル・キャピタルとしての地域の人の力と繋がりが必須である。逆に人の力と繋がりを醸成していけば、様々な有形無形の資源が地域の観光資源、産業資源として蘇ると考える。

本研究は、こうした仮説の実証研究として、大学の地域協働型 PBL 教育（いわゆる実践教育）を通じて学生主導によるプロジェクトを実践し、この活動を通して、地域の観光資源開発に結びつく無形資産としてのソーシャル・キャピタルの醸成を図り、これをどのように活性化し観光資源に結びつけていくのかのヒント（インプリケーション）を得ることを目的としている。本研究は 2017 年 4 月に開始している

が、11月以降も継続して実行する。

本研究は福知山公立大学の4年生の実践教育の一環として企画するため、プロジェクトに参加する大学生は、それぞれに個別の研究小テーマを持ち、このプロジェクトを生きた事例として捉え、仮説検証過程を持つ卒業研究を進めている。以下は今年度の研究論文題名の例である。この研究の経過は、グループの発表として9月に日本観光学会で発表した。

1. 地域における観光資源の有効活用：2つの地域の事例比較から
2. 観光事業に向けた無形資産発掘：福知山市の事例から
3. 観光産業振興のための企業と地域社会との協働のあり方
4. 観光事業における戦略理論の有効性：福知山市での検証
5. 伝統工芸継承と地域活性化：福知山の和紙文化を中心に
6. 地域特産物のマーケティング戦略：福知山市を中心に
7. 地域社会の将来像と次世代教育：福知山市での調査をもとに

すなわち、研究はプロジェクト全体での仮説検証と、プロジェクトの成員である個々の学生の個人研究における仮説検証という2つの側面をもって行われる。

3. 先行研究レビュー

溝上(2016)によれば、いわゆる PBL には問題解決型学習(problem-based learning)とプロジェクト学習(project-based learning)の2つがあり、ともに AL (active learning)の一つとして位置付けられるという。このうち、問題解決型学習は、1960年代後半の医療系大学で始まったもので、学生が現実の医療問題に取り組み学習知識を駆使しながらこれを解決していくものとして考えられたという。一方、プロジェクト学習は、Dewey の教育思想に端を発し、20世紀初頭の初等教育から次第に高等教育へと広がっていったものとのことである。これは解決すべき問題をプロジェクトのテーマとして捉え、仮説検証に向かうもので、学生版の研究活動だと言われることもあるという。溝上(2016)は、プロジェクト学習とは、「実世界に関する解決すべき複雑な問題や問い、仮説を、プロジェクトとして解決・検証していく学習のことである。」と定義している。

PBL 教育の方法論は、工学教育（高橋ほか（2002））、IT 教育（澤口（2012）ほか）など幅広い分野で議論されており、どちらかといえば社会科学系よりはむしろ理工学系教育においてのほうが、教育効果が定量的に確認しやすく、教育方法論に関する研究事例も数多くある。駒谷（2009）によれば、IT 分野の人材育成に関しては、日本経済団体連合会も 2005 年に「産官学連携による高度な情報通信人材の育成強化にむけて」の中で IT 人材育成に PBL 教育が必要なことを述べており、この提言が文部科学省や大学にも影響を与えたということである。

理工学教育に比べ、社会科学系教育の分野では、教育効果を定量的に議論しづらい面があり、教育方法の効果の検証が理工系ほど明快ではないという側面もある。しかしだからこそ、社会科学系教育においても、PBL 教育のディテールについて、学生の内発的成長と実社会の課題解決との相関にどのように取り組むのかなど、具体的な議論を活発化し、現場の教育実践を前進させていく必要がある。というのも、テーマの設定から、仮説を立て、仮説検証方法を立案したのち、実際に検証を行い、考察へと進む一連の過程

は、まさに普遍的な学術研究の過程と同様の過程であり、また企業活動における PDCA サイクルとも基本的には類似の過程であると考えられる。従って、これを教育過程として組み立てるということは、優れた問題発見・解決実践能力を有する主体的行動人の育成に寄与するだけでなく、学問・教育・実社会をつなぐ方法論の緊密なリンケージの形成へも寄与するものとなる。

具体的な教育の組み立てについては、取り扱う課題の特質や教育の対象となる学生の属人的な特質など様々な個別事象にも対応する必要がある、こうした教育の前進のためには、詳細な事例の積み重ねとその中から導かれる示唆やヒントの抽出が極めて重要である。

4. 研究方法

具体的には、本年度の研究としては、9月に行ったプロジェクト第1弾「竹林と光のプロムナード」事業の継続を中心に行う。

この活動は、由良川ほとりに明智藪竹林の保全と観光資源としての活用に焦点を絞り、本学の学生、地域の小中学生、市民などとの連携を通じて実践しているものである。手法としては、市民、大学生、小中学生で、福知山の伝統工芸である和紙と、竹林の資源リサイクルとしての竹を素材に用い、灯籠を製作し、夜の明智藪竹林周辺を光のプロムナードとして変貌させる。イベントは、青年会議主催の9月17日開催のキャンドル・ナイトと連携して展開したが、当日あいにくの大雨で、急遽中止となってしまった。活動の連携先としては、丘児童センター（小学生）、上川口小学校（小学生）、金谷小学校（小学生）、川口中学（中学生）、環境会議（市民）、福知山和紙伝承館（伝統工芸関係者）、福知山青年会議（企業経営者）、福知山市役所環境政策室（行政）などである。

そこで、この年末ないし年始に、冬のイベントとして、大学の学生を中心に独自に光のイベントを再度計画し、この事業をさらに発展させていく。また活動に参加した大学生、環境会議、小・中学生などへのヒラリングや感想文依頼などから、活動全体の効果検証を行っていく。

5. 研究成果

（1）教育実践を通じた学生の「気づき（内発的成長）」

教育実践を通じた大学生たちの「気づき」について、11月以降に検証した内容について以下に述べる。

いわゆる観光地における地域資源のアピールの仕方や発掘について、前述のように学生達を2016年5月に京都嵐山へ連れて行き、気がついたことを何でもいいから10個以上メモするように指示した。一方同様の調査を、イベント開催後の11月に、兵庫県篠山に対して行った。学生たちの地域資源に対する「気づき」について2回のアンケートを比較すると、イベント前の嵐山調査の際は、ある程度教員からヒントを与えることで触発されていたが、イベント開催後の篠山調査の際は、教員からヒントを与えなくとも、自発的に10ケの気づきを書くようになっており、気づきの感性が磨かれていったことをうかがわせた。

*篠山での気づき（学生のメモから一部掲載）

1. 篠山城の中は、展示物とシアターをうまく組み合わせて展示していた。説明がわかりやすい

2. 篠山城の中は、明るく風通しが良く長く見学しても不快な気分にならない
3. 照明器具も凝っていて、美術品を魅力的に演出している
4. 休憩スペースの椅子なども（デザインが）雰囲気を壊していない
5. 篠山城周辺は土色の道路、大正ロマン館周辺は石畳調のタイル、道路と建物に一体感がある
6. 商店街では、店の外に商品を置いて、店員さんも店の外に出ていた
7. 店の人が明るく、元気で生き生きしていた
8. 商店街にBGMが流れている
9. 看板の多さ、（看板が）分かりやすい、黒くシックで落ち着いた色調
10. 子供連れでも楽しめるよう、所々に休める場所がある

一方、プロジェクトに参加した学生たちは卒業研究（レポート作成）を完成させた。

各学生の研究レポート題名を再掲する。

- 地域における観光資源の有効活用：2つの地域の事例比較から
- 観光事業に向けた無形資産発掘：福知山市の事例から
- 観光産業振興のための企業と地域社会との協働のあり方
- 観光事業における戦略理論の有効性：福知山市での検証
- 伝統工芸継承と地域活性化：福知山の和紙文化を中心に
- 地域特産物のマーケティング戦略：福知山市を中心に
- 地域社会の将来像と次世代教育：福知山市での調査をもとに

研究レポートは、それなりに学生たちの気づきにつながる仮説検証過程を含んでおり、例えば、「伝統工芸継承と地域活性化：福知山の和紙文化を中心に」というテーマを選んだ学生は、当初様々な地域の工芸産業がなぜ衰退していくものと継続ないし発展していくものに分かれていくかその原因となるイメージをつかめずにいたが、様々な事例を調査するに従い、消費者側の需要の違い、それに適合するような生産者側の工夫の仕方の違いなどに気づくようになり、伝統工芸を継承していく問題と地域活性化の問題との接点イメージができるようになっていった。灯籠のイベントに絡んだ様々な行動を積み重ねることと、並行して、個人の研究テーマに沿ってレポートを書き進めることが微妙にリンクし、実践活動での気づきが、研究過程での気づきとオーバーラップしていくような教育効果が生まれていた。

一人の学生は、大学院に進んで研究者となることを目指すこととなった。この学生は、リソース・ベースド・ビューとポジショニング・ビューという2系統の企業経営の戦略論の枠組みを、地域の観光産業の戦略に適用して、分析を進めた。地域の課題を分析的に見ることを、プロジェクトと並行して研究を進めるなかで学んでいった。

大学生達のレポートから、今回の一連の活動への感想の一部を以下に紹介する。

- 地域の活性化は決して他人ごとではなく、福知山市に住む住民が、自分たちの問題であるという自覚を促すことが必要であるという結論に至った。そこで、地域資源の発信と、福知山市民の地域への愛着を改善するために、若年の世代がこれらの地域資源に触れる機会を設けていくことが地域の発展、郷土意識の確立をしていくために重要であると考えた。観光客が福知山市内を楽しんで散策する様子

を見て、自分たちが住んでいる地域の資源を再認識すれば、地域への愛着が復活し、地域活性化や観光地化への取組みが進むのではないだろうか。しかしこれらを検証するためにはまだまだ繰り返し研究を重ねる必要があり、今後も継続して地域資源再発見を名目としたイベントを、福知山市の人々を巻き込んで開催していく必要がある。

- 嵐山という今では世界的に人気のスポットだが、最初は何もなかったところにアイデアを出して今の嵐山があるのだと感じた。やはり大事なものは何も考え、行動に移すことだと私は感じた。（中略）たくさん準備を進めてきたイベント当日だったが大雨で中止となってしまった。非常に残念だったがこの機会に本当に沢山の地域の方たちとコミュニケーションをとることができたし、今福知山にはどうすることが求められているのかもわかった気がした。また、長い間福知山に住んでいたが福知山市にはマスコットキャラがいるなど知らなかったことがまだまだたくさんあるなど思った。イベント自体は成功とは言いにくいものになったが沢山の地域の人達と協力し合い、自分たちが住んでいる町をよりよくしていく活動は悪くないと素直に感じる事ができた。まだまだこの企画は1年目であり、来年からも続けてぜひ嵐山のような観光地に福知山がなっていければいいと思う。（中略）しかし話を聞いているうちに地元の年配の人達は明るく元気だなと感じ、改めていいところだなと感じることができた。田舎にも人と人の繋がりであったり、自然などたくさんいいことはあると思う。私自身も今回グループワークをしてみて感じたことを同世代に少しでも伝え自分が生まれ育った町をよりよい町にしたいと感じた。（中略）振り返ると非常にいい経験を地元で就職する前にできたなと感じた。地域活性化の魅力や、人との繋がり、アイデアと行動力の大切さを学ぶことができた。これは来年からの就職にも必ず役立ってくると思うし、人として大切なことを学べたことが非常によかったと思う。
- ゼミでは、大江町の丹後二俣紙を使用した、和紙灯籠を「竹林と光のプロムナード祭」で明智藪にて展示するという取り組みを行ったが、（中略）あまり認知されていない明智藪と福知山城をつなげて観光のルートとすることや、福知山の小中学生と共に、地域資源である丹後二俣紙を使って和紙灯籠を作成したことや、丹後二俣紙自体の製品としての価値や職人の田中さん一家の製作過程やその歴史を売りに「物語性」を持たせた地域資産の発信の方法として有効だったのではないかと考える。（中略）いずれにしても、人々のライフスタイルの変化から、障子紙や書道用紙としての販売が難しいことから、新たなマーケットへの展開は重要であり、またそれが「持続可能性」のある事業であることも大切なポイントであると考えます。それにより、和紙という伝統工芸が、「伝統のある新しいもの」として認識され、時代を越えて人々に使われる良い流れが生み出せるのではないだろうか。

こうして学生に一定の成長を促し、自身の思考プロセスをレポートという形にまとめることができたのも、1年間という限られた教育期間の中で、それなりに実践活動のPDCAを回すことができたことが大きい。そのような教育的な意味で、地域の課題を、どのように学生の身の丈にあった形で切り取り、教育過程として組み立てるかという設計は、こうしたPBL教育の方法論として重要な点であると考えます。

（2）地域社会の人々の「気づき（内発的成長）」

今年9月までの活動を通じて連携や協働を行ったのは、丘児童センター（小学生）、上川口小学校（小学生）、金谷小学校（小学生）、川口中学校（中学生）、環境会議（市民）、福知山和紙伝承館（伝統工芸関係者）、福知山青年会議所（地元企業経営者）、福知山市役所（行政）などである。

こうした緩い紐帯による多様な人々とのネットワークが、活動に広がりを与え、結果的に地域社会に与える影響力を増すことになったと考えられる。これを、図1に模式的に示す。

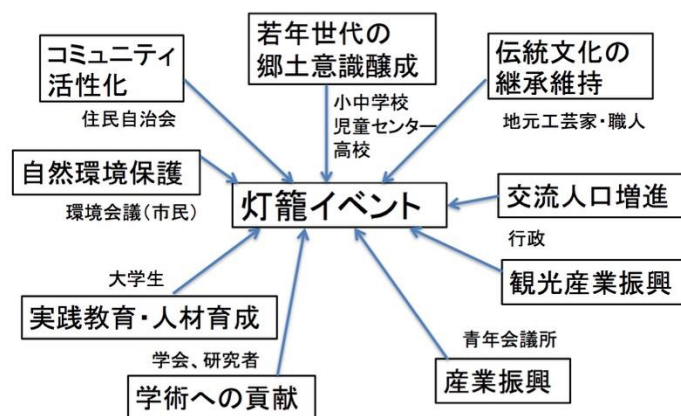


図1. 教育プログラムでの連携体制（大学を中心とした緩い紐帯の形成）

一連の活動には、100人近い小・中学生と大学生が関わり、また環境会議や青年会議所といった地域社会の人々とも連携することができた。

9月までの活動が実際に地域に与えた影響の定量的な検証は、残念ながらイベント開催後に予定していたアンケート調査が、イベントの失敗による行うことができなかつたため、十分行う手立てがなくなつてしまった。しかし、途中のプロセスとして、小・中学生への工作教室開催後、小学生から感謝の手紙が寄せられたことを紹介したい。代表的な2例のみ引用する。

- 「この前、とうろの作り方を教えてくださつてありがとうございました。とうろはとってもきれいな物なんだなあと思つたし、また作りたいなと思つました。作つたとうろを9月のイベントに持っていきたいです。本当にありがとうございました。」
- 「この前先生に教えていただいたとうろは、今でも大切に持っています。また、夜に光をつけてみたいです。そしてキャンプのときに持って行ってみんなで光をつけて楽しみたいです。」

こうした手紙だけでは、まだ活動が若年層の郷土意識にまでどのような影響を及ぼしたか十分にはうかがい知ることができないが、若年層の内面にそれなりに影響を与えたことは定性的に確認できる。

環境会議に参加している社会人の方からは、その後以下のような感想文を得ている。

- 今回のイベントを通して、福知山公立大学の学生の「繋げる力」に非常に関心しました。今回のイベント成功の鍵は、地元の小・中学校を巻き込めたことと伝統工芸やリサイクルなど枠に囚われず

様々な分野の要素を盛り込めたことにあると思っています。特に、地元の小・中学校がブロック単位で参加してくれたことはとても大きなことです。本来であればなかなか自由のきかない小・中学校が、ブロック単位で参加できたことは、大学生に触れ合うことで従来の教育カリキュラムでは学ぶことのできない感性や考え方を学べるではないかという期待が大きな魅力としてあったからだと思います。（中略）また、伝統工芸の二俣和紙を灯籠に活用することや牛乳パックなどのゴミを灯籠の骨格にする案など、様々な分野の要素をどんどん盛り込んだこともイベント成功要因の一つだと感じています。枠に囚われず、様々な分野を軽いフットワークで結び付けイベントを進められたことは、私たちも見習いたいと思います。

今回の教育実践から得られた示唆として、PBL教育は、個人の内発的成長を促すという要素の他に、教員や関係者である地域社会の人々にも内発的成長を促し、共創的な人間関係を作るというネットワーク形成にも大きな力を及ぼすということがある。究極的に一つの課題を解決するには、多くの年月を要すると考えられるが、地域協働型のPBL教育では、むしろその課題解決のプロセスが重要であり、大学生のみならず、周辺の関係者自身が活動に関わることで内発的成長をとげていくこと、そしてそれらが協働の中で行われることで、地域のソーシャル・キャピタルが蓄積され、間接的に地域の課題解決力を高めていくという側面が重要であると考えられる。（下図参照）

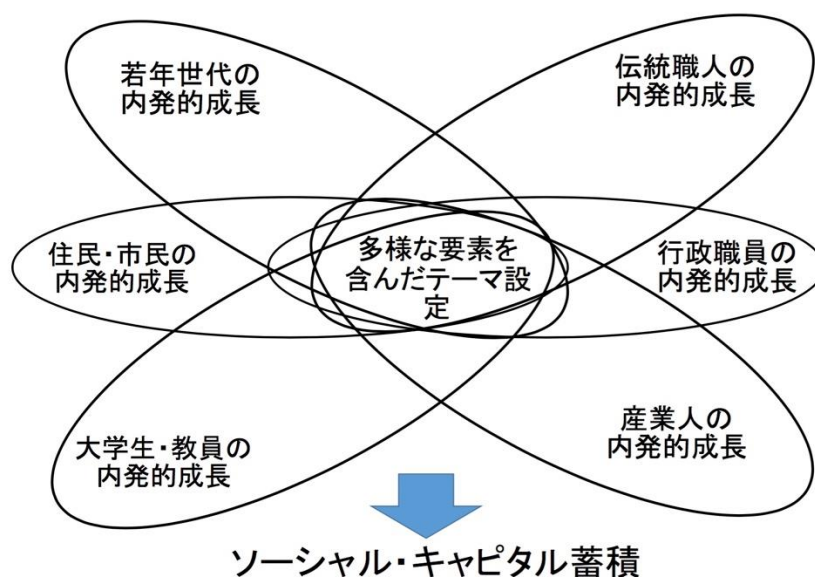


図2. PBL教育のテーマ設定と多様なコミュニティとの共創性

今回の活動結果の定性的な分析と考察により得られた示唆としては、地域へ与えるインパクトをより多く生み出すためには、多様で広範囲の人々を巻き込み緩い紐帯を形成できるよう、テーマそのものに多面性・複合性をもたせることが重要である、ということが挙げられる。

11月以降の活動の検討課題としては、冬にもイベントを行い、その効果を検証していくことを目標としたが、現実には、前回のイベントで雨のため和紙の灯籠が濡れてしまい、イベントとしては失敗だった

点の技術的な克服で終わってしまった。様々な和紙灯籠の試作をおこない、和紙灯籠に防水スプレーを塗るなど細かいディテールの再設計を行ったが、結論としては、比較的低コストでかつ雨に耐える構造は、市販の食品用アクリル容器を用い、内部に和紙と LED を配して、灯籠とするものに落ち着いた。この検討だけで数ヶ月かかり、結果として冬のイベントは開催が間に合わず、直のイベントは来年度に持ち越すこととなった。今後のイベントとしては、

- 1) 他の多くの北京地域イベントと連携させる（地理空間的展開）
- 2) より多くの小・中学校、高校などを巻き込んでいく（世代的展開）
- 3) 商店街でのマルシェなど他の地域社会の活動と連携させていくこと（地域社会内での展開）
- 4) 環境会議のより広範囲な環境保全活動とも繋げていくこと（環境保全での展開）
- 5) 和紙のラッピングペーパーなどのコンテストなどを並行して行うことで、和紙の商品化や伝統工芸産業の活性化に多少とも資する活動にする（産業的展開）
- 6) 造形のみならず音楽や演劇、ダンス等より広範なジャンルの活動を包含するアート・フェスティバルとして展開する（文化的展開）

など様々な可能性を追求していく予定である。

こうしたことが、実際に観光資源としてどの程度の力を持ち、観光客の誘引に結びついていくかは、現時点では議論するほどまでにいたっていないが、今後継続して検証していく必要がある。

（3）今後の課題

次年度は、イベント活動だけではなく、町の中での活動拠点の形成や、地元商店街などを巻き込んだ定常的な活性化活動へとつなげるなど、新たな要素を盛り込むことを考えている。

こうした地域協働型 PBL 教育を、大学全体でどのように構築していくか、と言う観点も重要である。すなわち、地域の主要な課題を洗い出すだけでなく、地域経営全体のバランスの中で、どのような問題にどのような比重を置き、地域全体の課題を大学全体で取り組んでいくか、といった総合的な取り組みである。無論、対象となる地域ごとの属性が大きく関わってくるため、大学のある地域自体の課題解決という側面と、大学で教育を受けた人材が国内ないし世界に飛び立ち、いろいろな属性をもつ地域で活躍していくための教育的な配慮、の両面から検討する必要がある。大学の地域協働型 PBL 教育の組み立てについては、さらに現実に大学にいる教員の個性や経験、専門性も加味して実現しなければならず、そうした様々な点を配慮した議論を今後も継続していく必要がある。

6. まとめ

2017年4月から行ってきた地域協働型 PBL 教育について、引き続き行い、主としてその効果検証と、イベントなどの継続を図った。

効果検証については、活動に参加した大学生、環境会議の方々、小・中学生などへのヒヤリングや感想文依頼を行い、それぞれに活動によって地域資源の重要性への気づき、活動における連携手法に対する気づき、和紙灯籠づくりへの参加による喜びなど、参加者の様々な気づきや喜び、連携感が醸成されることを定性的に検証した。イベントの継続のため、防水型和紙灯籠の開発を行い、今後、地理空間的展開、世代的展開、地域社会内での展開、環境保全での展開、産業的展開、文化的展開など様々な形で活動の影

響力を大きくし、こうしたイベント活動の観光資源としての効果についても、今後継続して検証していく必要がある。本研究を通じて得られた示唆として、緩い紐帯で結ばれた多様な人々を巻き込み、多様な活動として展開することが、地域全体の観光を下支えするソーシャル・キャピタルの醸成につながる可能性があり、この点も今後継続して検証していく。また、こうした活動の地域全体に与える影響などについて、さらに多面的な視点から、狙いや対象、方法などを再考していく必要がある。

参考文献

- (1) 青山公三, 公共政策学の新しい実践教育手法, 地域課題解決型実践教育プログラム「キャップストーン」の試み, 京都府立大学学術報告 (公共政策) Vol. 5, pp. 73-82 (2013)
- (2) 井上明, PBL 情報教育の学習効果の検証, 情報処理学会研究報告, 2007-IS-99, pp. 123-130 (2007)
- (3) 今井康雄, 教育思想史, 有斐閣アルマ, (2009)
- (4) 尾松一喜, 白数知香, 穂満温巳, 平野真, 地域資産の発掘と若年世代の郷土意識の形成-福知山『竹林と光のプロムナード祭』の企画と実践から, 日本観光学会第110回全国大会研究発表要旨集, pp. 30-31, (2016)
- (5) 駒谷昇一, PBL は教育にどのようなインパクトがあるか, 情報教育シンポジウム, pp. 131-138 (2009)
- (6) 澤口隆, PBL 手法を用いたワークショップの実践とプログラミング教育-湘北ラーニング・commonsの活用, 湘北短期大学NII-Electronic Library Service, pp. 147-162 (2012)
- (7) 高橋英明, 岸浪建史, 工藤一彦, 三上隆, 全学初習・工学部専門教育における創成型教育の試み, 後学教育, Vol. 50, No. 3, pp. 37-43 (2002)
- (8) 溝上慎一監修, アクティブラーニングシリーズ1~6, 東信堂, (2016) (特に「2. アクティブラーニングとしてのPBLと探究的な学習」)
- (9) J・Dewey, “The School and Society,” The University of Chicago, (1915) (宮原誠一訳, 学校と社会, 岩波文庫, (1957))
- (10) J・Dewey, “Democracy and Education” The Macmillan Company, (1916) (松野安男訳, 民主主義と教育, 岩波文庫, (1957))
- (11) J・Dewey, “Experience and Education,” The Macmillan Company, (1938) (市村尚久訳, 経験と教育, 講談社学術文庫, (2004))
- (12) 馬場孝, 国際関係学における教育方法と内容の展開 (上) : 米学会誌掲載論文サーベイ, 静岡文化芸術大学研究紀要, Vol. 9, pp. 51-64. (2009)
- (13) 平野真, アートを媒体とした地域共同体の創生—徳島県神山町の事例の示唆するもの, ベンチャー・レビューNo. 18, (研究ノート) pp. 73-78 (2011)
- (14) 平野真, 横川美貴, アートによる地域活性化—地域に与える多様な影響の考察—, 地域活性研究, Vol. 2, pp. 67-76 (2011)
- (15) 平野真, アートによる地域活性化～新たな地域経済創出への方法論として, 四国経済連合会 (2011)
- (16) 平野真, アートによる地域活性化—鶴来島プロジェクトに見る自律分散型連携の可能性, 地域活性研究, Vol. 3, pp. 279-288 (2012)

(17) 福知山市ホームページ, <http://www.city.fukuchiyama.kyoto.jp/> (2016.10.3)

(18) 福知山市, 未来創造 福知山, (2016)

(19) 文部科学省, 大学教育の質的転換に向けた実践ガイドブック, リベルタス・クレオ出版 (2014)

(20) 和紙伝承館ホームページ

<http://www.city.fukuchiyama.kyoto.jp/life/facilities/entries/000602.html> (2016.10.3)

本研究によるアウトプット

1) 解説記事

平野真「大学教育と地域資源開発-福知山公立大学での PBL 教育事例を通じて」

福知山公立大学研究紀要、第一巻、第 1 号、pp. 141-168、2017 年 3 月。

2) 研究会発表

平野真「大学の地域密着型 PBL による地域資源開発-福知山市での『竹林と光のプロムナード祭』開催を通して」大学コンソーシアム京都、第 2 2 回 FD フォーラム、ポスターセッション。

3) 講演会

平野真「アートによるまちづくり」綾瀬中丹文化センター、平成 2 7 年 2 月 1 8 日 (土)

平野真「売れる産物へ-農産物、工芸品の新たな可能性」上宮津公民館、平成 2 7 年 3 月 1 8 日 (土)

平野真「売れる産物へ-農産物、工芸品の新たな可能性」夜久野、平成 2 7 年 3 月 2 0 日 (月)

4) 新聞記事掲載

平成 2 9 年 2 月 2 2 日 (水) 綾部市民新聞「アートによるまちづくり、福知山公立大学教授が講演」